

主 要 果 実 の 需 要 動 向 等 に つ い て

平成 1 6 年 1 0 月 7 日
農 林 水 産 省 生 産 局

目 次

1 主要国産果実の動向

(1) うんしゅうみかん	1
(2) その他のかんきつ	2
(3) りんご	3
(4) ぶどう	4
(5) 日本なし	5
(6) 西洋なし	6
(7) もも	7
(8) おうとう	8
(9) びわ	9
(10) かき	10
(11) くり	11
(12) うめ	12
(13) すもも	13
(14) キウイフルーツ	14
(15) パインアップル	15

2 輸入果実の動向

(1) バナナ	16
(2) オレンジ	17
(3) グレープフルーツ	18
(4) レモン	19
(5) その他の輸入果実	20

3 現行基本方針における22年度すう勢値の推計方法について

(1) 生鮮果実	21
(2) 果実加工品	22
(3) 輸出	22

1 主要国産果実の動向

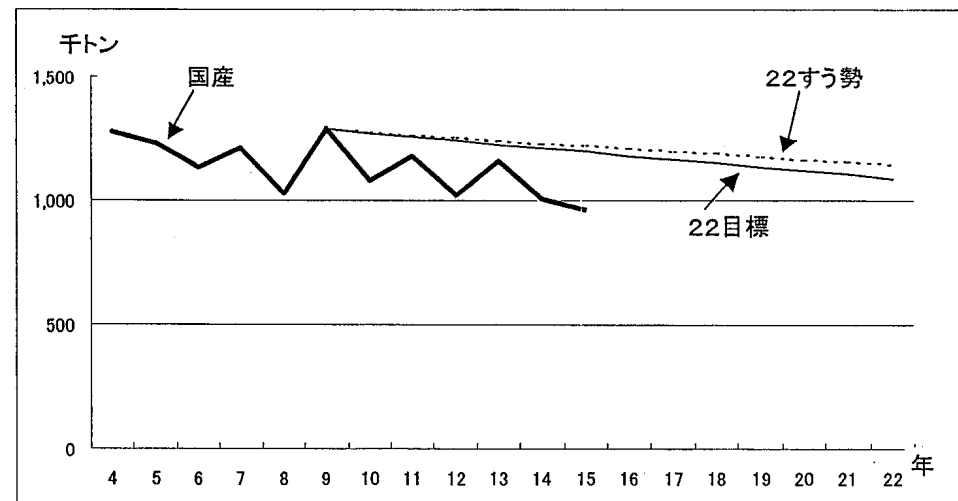
(1) うんしゅうみかん

① 生鮮果実

うんしゅうみかん生鮮果実の国内消費仕向量は、隔年結果性による表年と裏年の変動が大きいものの減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移している。

うんしゅうみかんについては、平成13年度から需給調整・経営安定対策を実施しており、今後とも、毎年度の需要量を検討の上、適正な生産出荷量とすることが必要である。

○ うんしゅうみかん生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



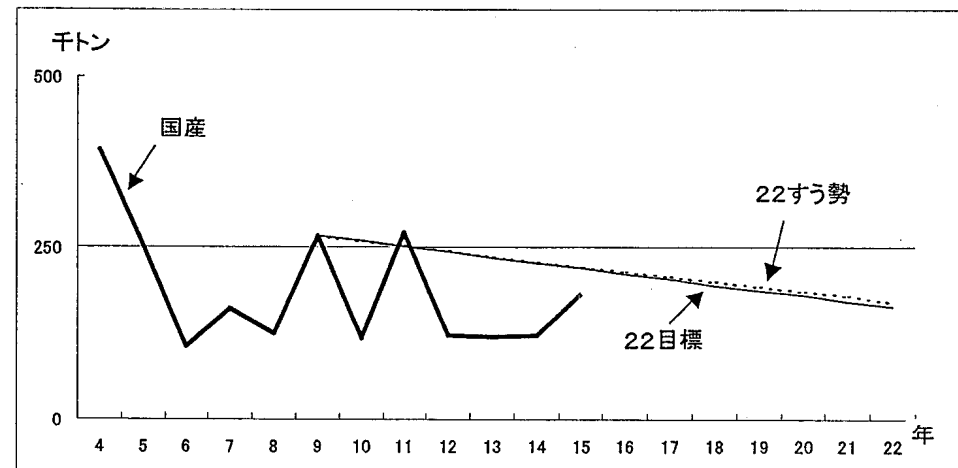
資料：農林水産省「食料需給表」及び果樹花き課調べ。
注：平成15年度は概算値である（以下同じ）。

② 果実加工品

うんしゅうみかんの果実加工品（果汁及び缶詰）の国内消費仕向量は、生鮮果実の豊凶により大きく変動しているものの、平成4年4月のオレンジ果汁輸入自由化以降、大きく減少しており、また、平成13年度から需給調整対策として、摘果等による生産調整を実施していることもあり、平成22年度目標を下回って推移している。

近年、うんしゅうみかんの果実加工品に豊富に含まれる健康機能性成分（β-クリプトキサンチン等）の解明が進んでいるとともに、消費者の本物志向に応えたストレートジュースに一定の需要があるところである。

○ うんしゅうみかん果実加工品の国内消費仕向量の推移等



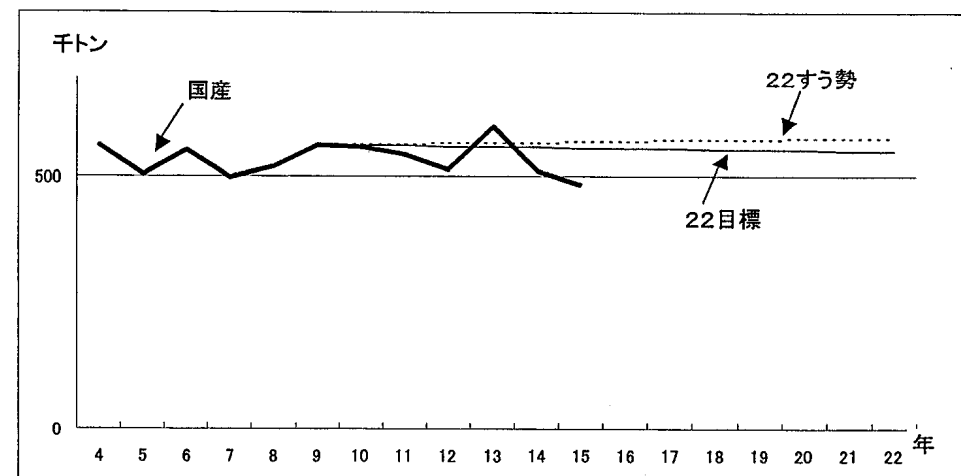
(2) その他のかんきつ（うんしゅうみかん以外のかんきつ）

① 生鮮果実

なつみかん、いよかん、はっさく、ネーブルオレンジの四晩かんの生鮮果実の国内消費仕向量は、平成22年度目標を下回って減少傾向が継続しているが、不知火、せとか等高糖系で剥皮性の良い晩かん類が四晩かんから転換されている。

その他のかんきつについては、4月～6月の国産果実の端境期に出荷できる晩かん類の新品種への転換を進めることが必要である。

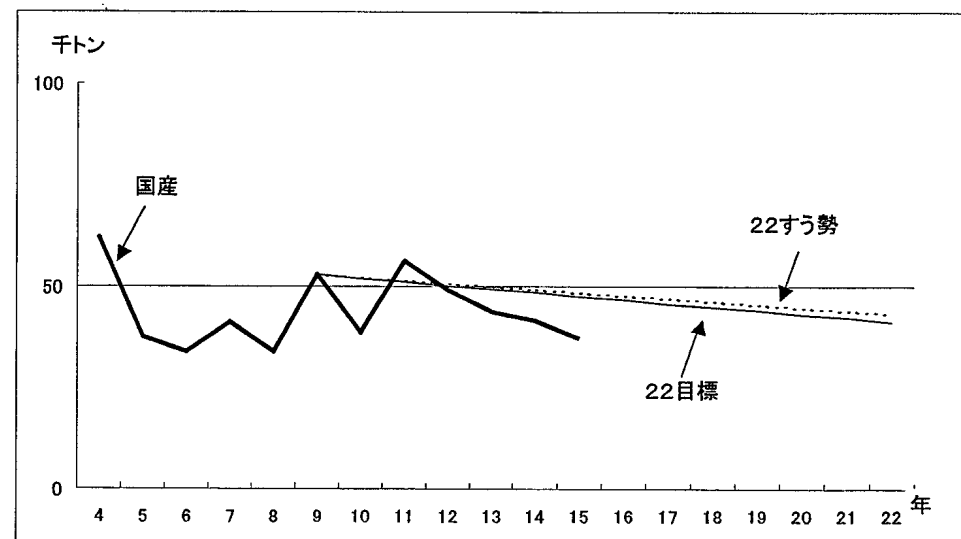
○ その他のかんきつ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 果実加工品

その他かんきつの果実加工品の国内消費仕向量は、平成9年産、11年産、12年産と平成22年度目標を達成した年もあったが、近年は平成22年度目標を下回って推移している。その他のかんきつについては、品目ごとに独特の風味があることから、多様な特産かんきつの果実加工品が開発されているところである。

○ その他のかんきつ果実加工品の国内消費仕向量の推移等



(3) りんご

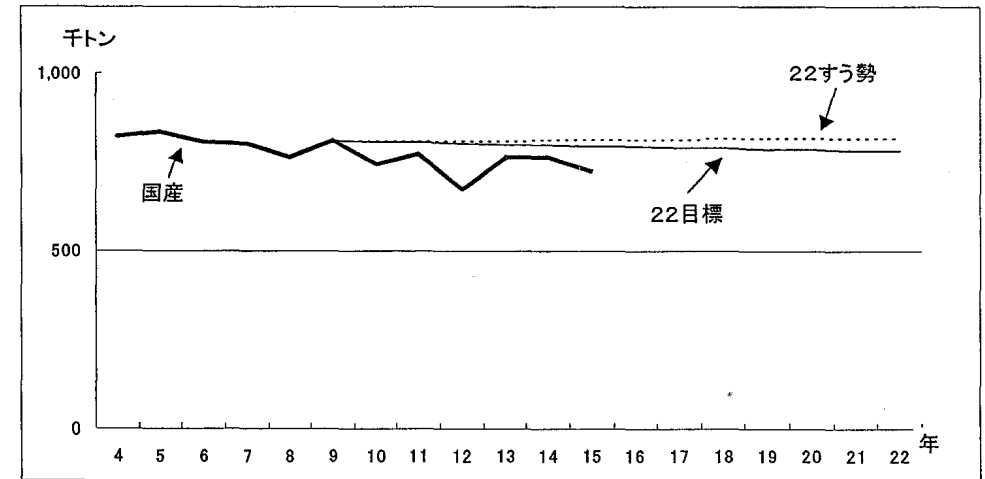
① 生鮮果実

りんごの生鮮果実は、そのほとんどが国産で供給されているが、近年の国内消費仕向量は、景気の低迷、食の簡便化志向の進展等により、平成22年度目標を下回って推移している。

また、平成13年度から需給調整・経営安定対策を実施しており、今後とも、毎年度の需要量を検討の上、適正な生産出荷量とすることが必要である。

なお、シナノゴールド、シナノスイート等有力中生種の出荷量が増えつつあり、さらに、あおり9号、昂林等新たな品種が各県で開発されているところである。

○ りんご生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



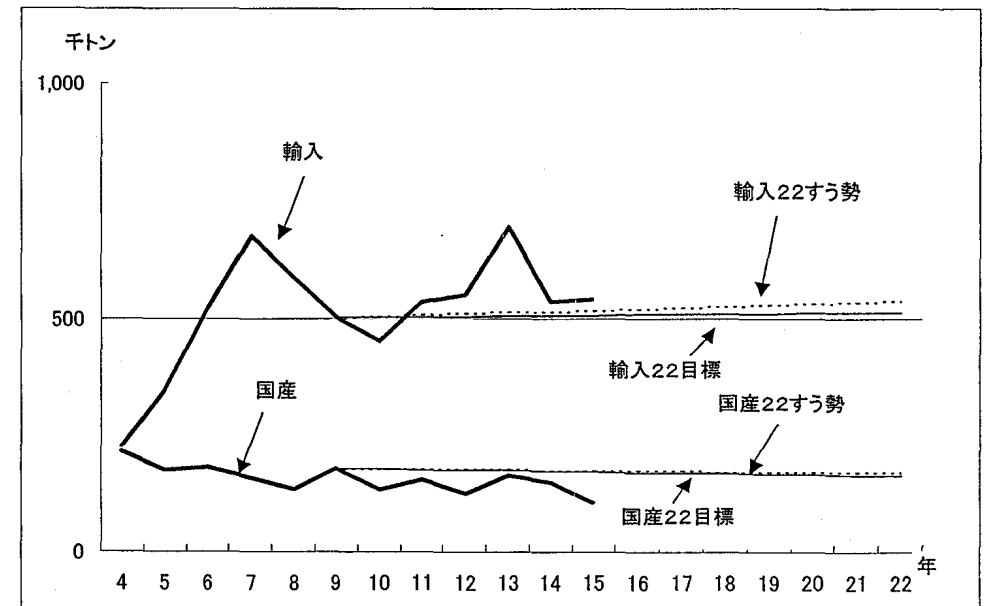
② 果実加工品

果汁を中心とするりんごの輸入加工品の国内消費仕向量は、健康志向を背景にミックスジュースが増加した平成13年を除き、近年はほぼ横ばいで、平成22年度目標を上回って推移している。

一方、国産加工品の国内消費仕向量は、近年減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移している。

国産果実加工品については、混濁りんごジュース等の需要が、輸入加工品については、ミックスジュース等の需要があるところである。

○ りんご果実加工品の国内消費仕向量の推移等

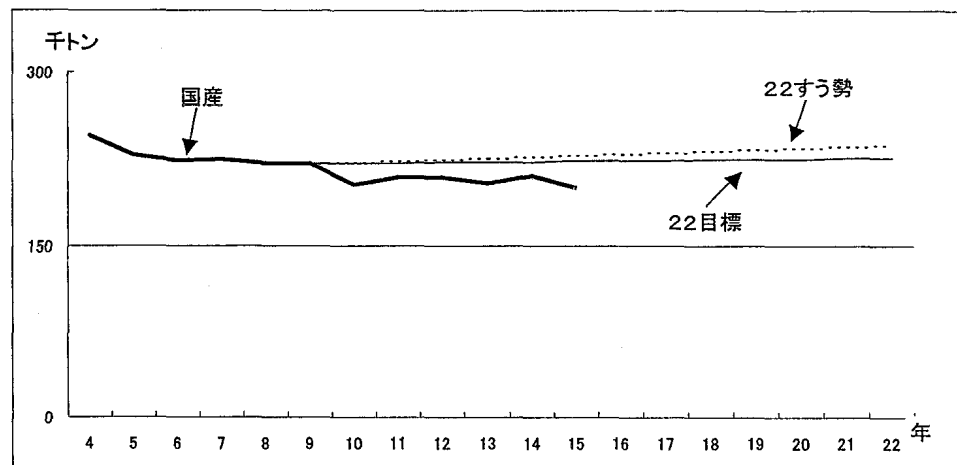


(4) ぶどう

① 生鮮果実

国産ぶどうの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年、横ばいで推移しつつも、平成22年度目標をわずかに下回って推移しているが、デラウェアに代わりニューピオーネ等大粒無核品種や安芸クイーン等大粒系品種も出荷されているところである。

○ ぶどう生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

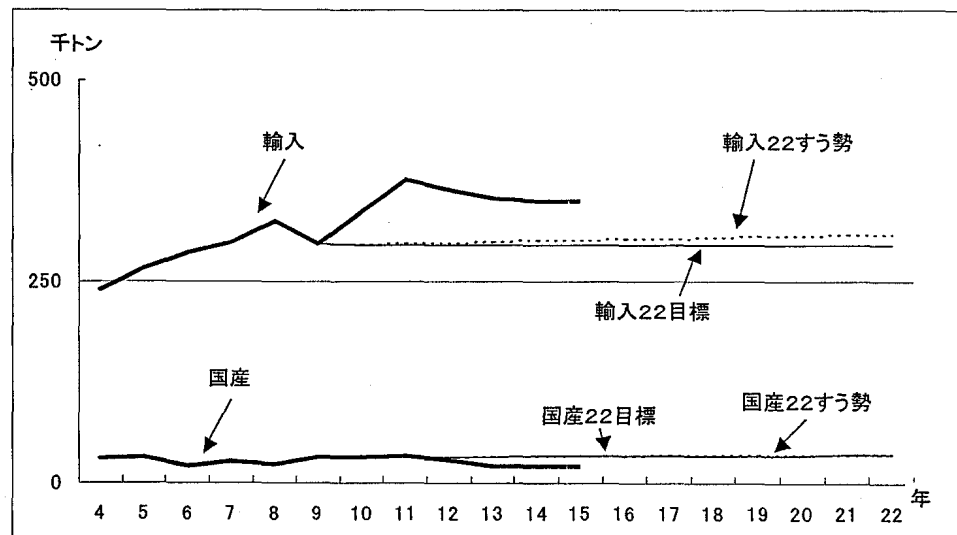


② 果実加工品

果汁を中心とするぶどうの輸入加工品の国内消費仕向量は、近年増加傾向にあり、平成22年度目標を上回って推移している。

一方、国産加工品の国内消費仕向量は、近年減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移している。

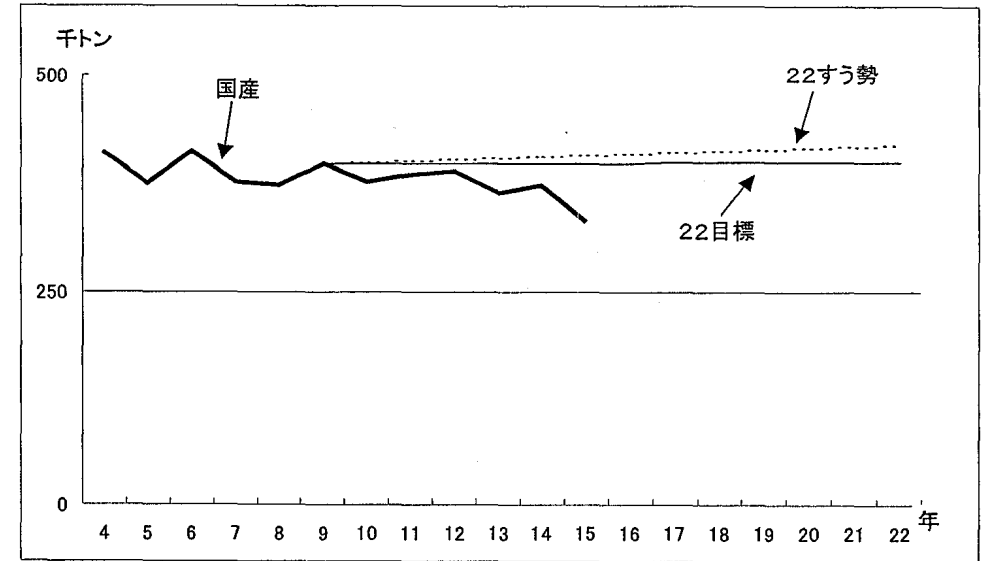
○ ぶどう果実加工品の国内消費仕向量の推移等



(5) 日本なし（生鮮果実）

日本なしの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年、横ばいで推移しつつも、二十世紀なしの減少等により平成22年度目標を下回って推移しているが、ゴールド二十世紀等新たな青なし品種への転換や南水等新たな品種も出荷されているところである。

○ 日本なし生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

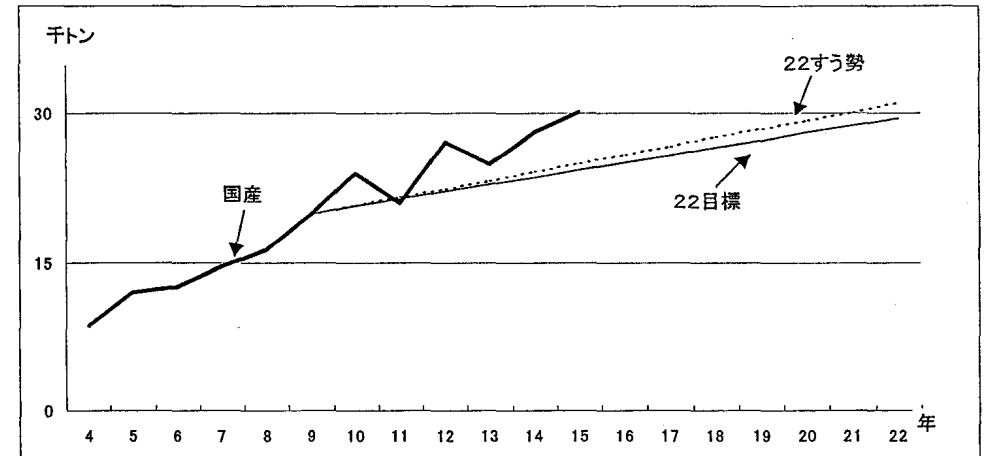


(6) 西洋なし

① 生鮮果実

西洋なしの生鮮果実の国内消費仕向量は、堅調な需要に支えられ増加傾向で推移しており、平成15年度で平成22年度目標を超過している。

○ 西洋なし生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

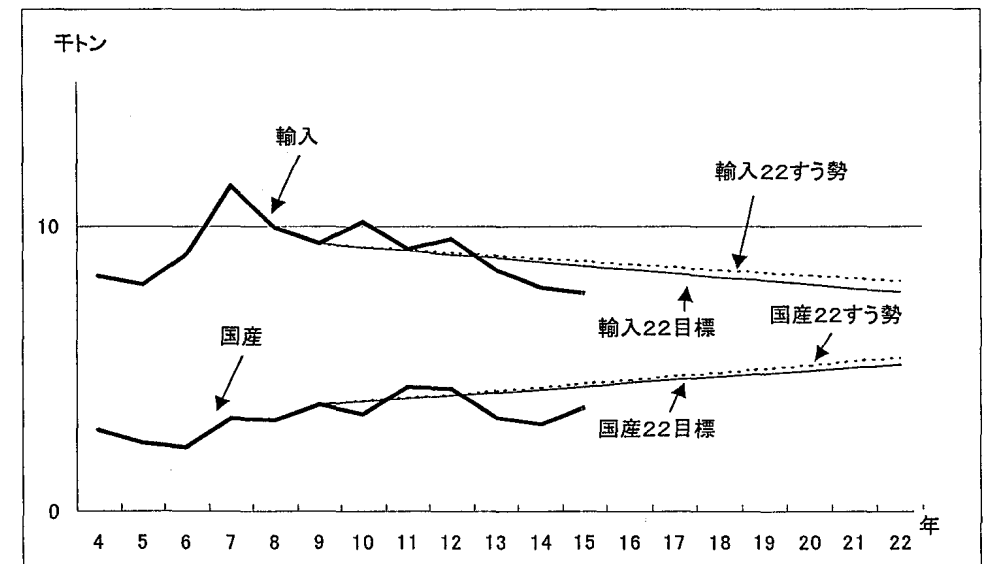


② 果実加工品

西洋なしの国産加工品の国内消費仕向量は、生鮮果実が増加傾向であるものの、一定量が加工に仕向けられていることから、ほぼ横ばいで推移し、平成22年度目標とほぼ同水準となっている。

輸入加工品の国内消費仕向量は、近年1万トン前後でわずかに減少傾向となっており、平成22年度目標と同水準となっている。

○ 西洋なし果実加工品の国内消費仕向量の推移等

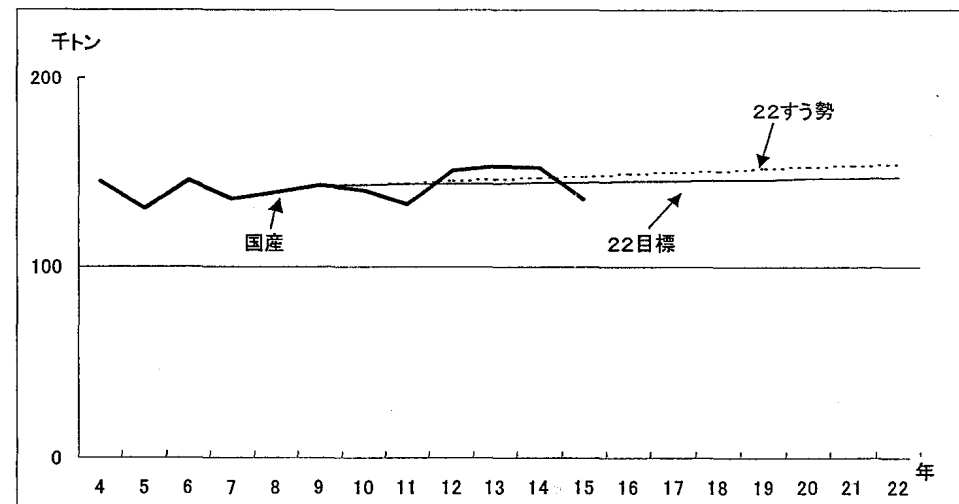


(7) もも

① 生鮮果実

ももの生鮮果実の国内消費仕向量は、平成15年産が冷夏による落果、品質低下等から出荷量が減少したものの、平成12～14年においては、平成22年度目標を超過するなど堅調に推移している。平成16年6月に実施した消費者アンケート調査によると、「味にばらつきが多い」と消費者が感じる品目であるものの、今後増やしたい品目の一つとなっているとともに、光センサー選果等の取組みが進んでいるところである。

○ もも生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

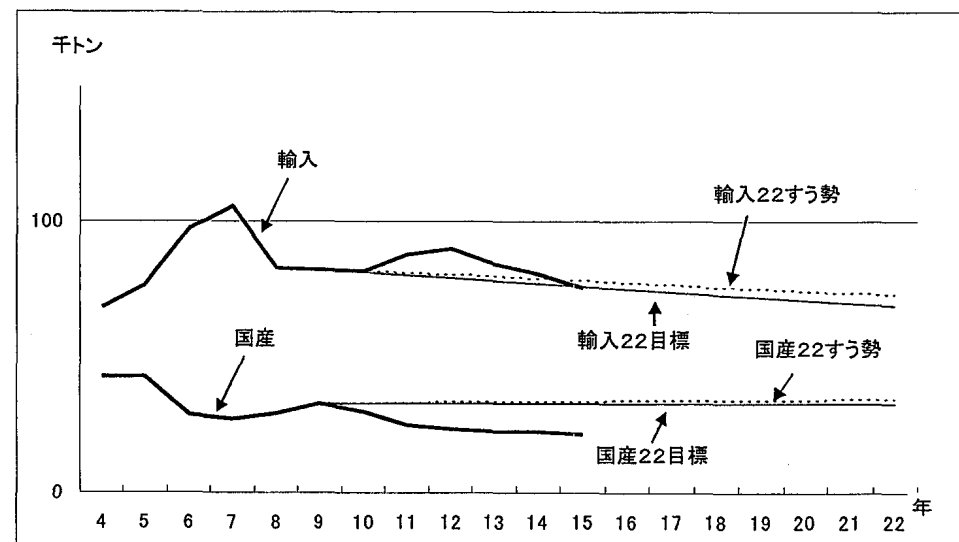


② 果実加工品

ももの国産加工品の国内消費仕向量は、平成22年度目標を下回りつつ、近年、2万トン前後でわずかに減少傾向で推移している。

一方、ももの輸入加工品の国内消費仕向量は、平成7年の106千トンをピークに減少傾向で推移している。

○ もも果実加工品の国内消費仕向量の推移等



(8) おうとう

① 生鮮果実

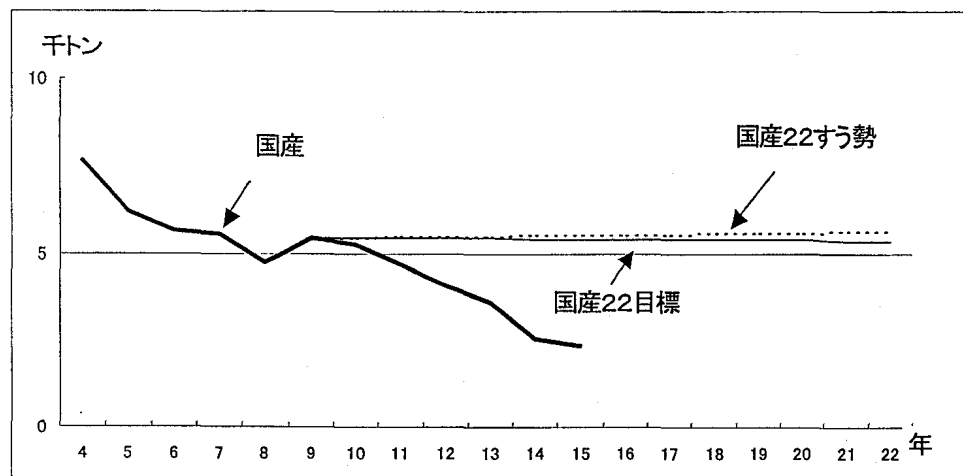
国産おうとうの生鮮果実の国内消費仕向量は、平成22年度目標に沿って増加傾向で推移している。

一方、輸入おうとうの生鮮果実の国内消費仕向量については、平成22年度目標を上回って推移している。

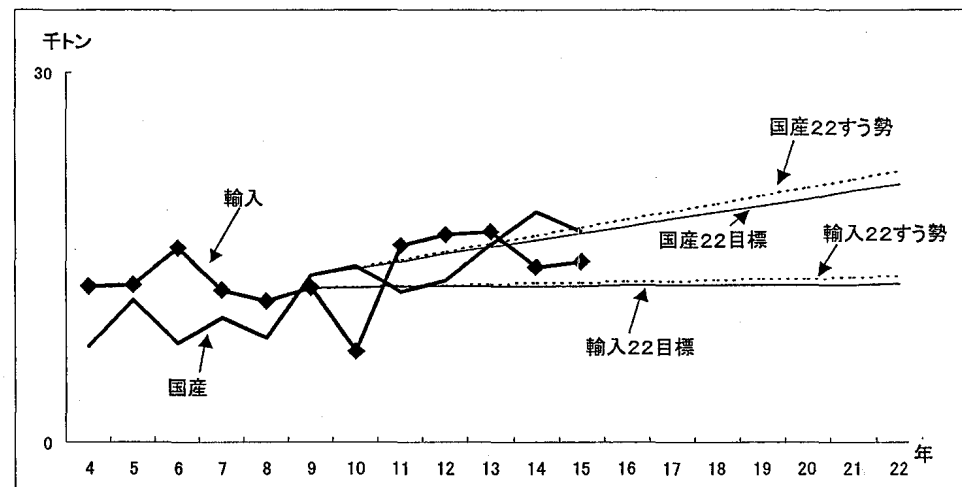
② 果実加工品

おうとうの国産加工品の国内消費仕向量は、生鮮果実の需要が堅調であることから、近年減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移している。おうとうの輸入加工品の国内消費仕向量は、5千トン前後で横ばいであり、平成22年度目標を下回って推移している。

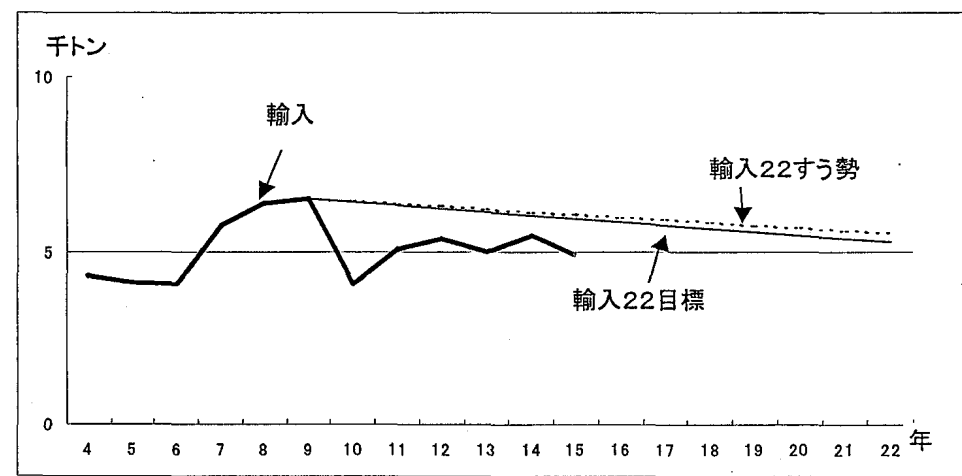
○ 国産おうとう果実加工品の国内消費仕向量の推移等



○ おうとう生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



○ 輸入おうとう果実加工品の国内消費仕向量の推移等

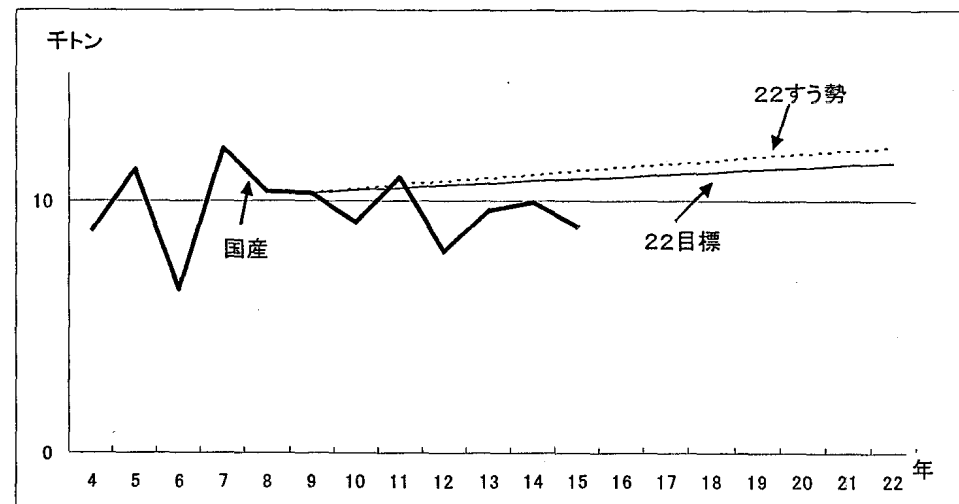


(9) びわ（生鮮果実）

びわの生鮮果実の国内消費仕向量は、1万トン前後で、近年、わずかに減少傾向となっているものの、平成22年度目標とほぼ同水準で推移している。

びわは、産地が限定された特産果実の代表的な品目であることや涼風、陽玉等の新品種も開発されているところである。

○ びわ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

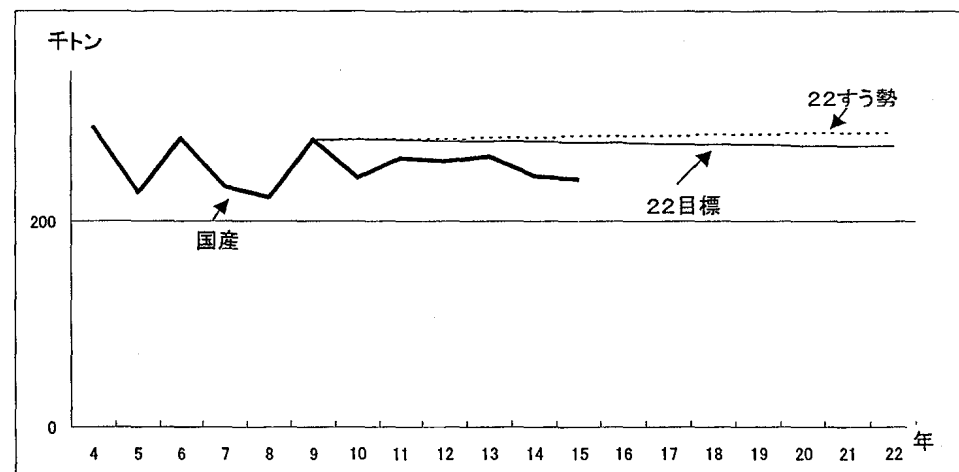


(10) かき

① 生鮮果実

かきの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年ほぼ横ばいであるが、平成22年度目標を下回り25万トン前後で推移している。今後、ハウス栽培から冷蔵柿までの長期出荷への取組に加え、太秋等の高品質新品種が開発されているところである。

○ かき生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

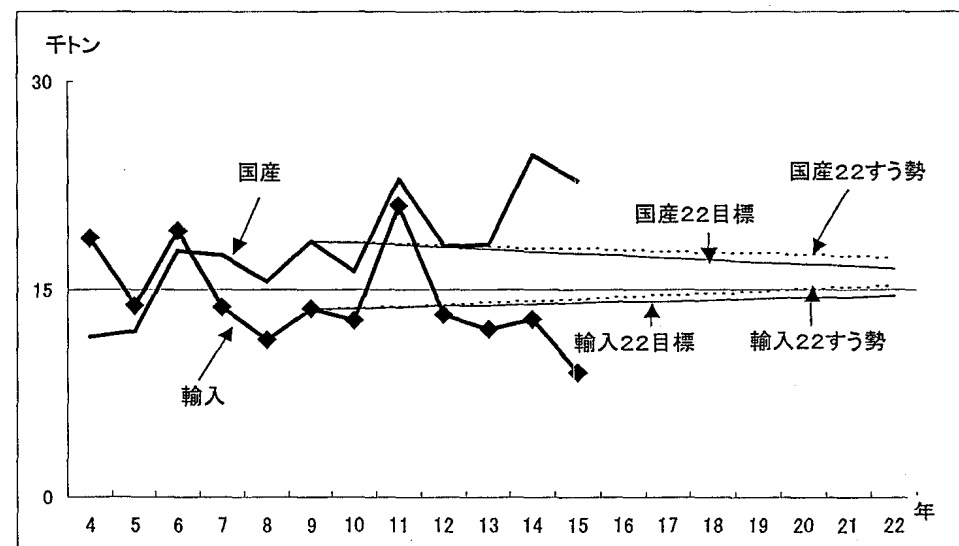


② 果実加工品

かきの国産加工品の国内消費仕向量は、地域特産品（干し柿）として根強い需要があることから平成22年度目標を上回って推移している。

輸入加工品の国内消費仕向量は、12千トン前後で平成22年度目標を下回って推移している。

○ かき果実加工品の国内消費仕向量の推移等

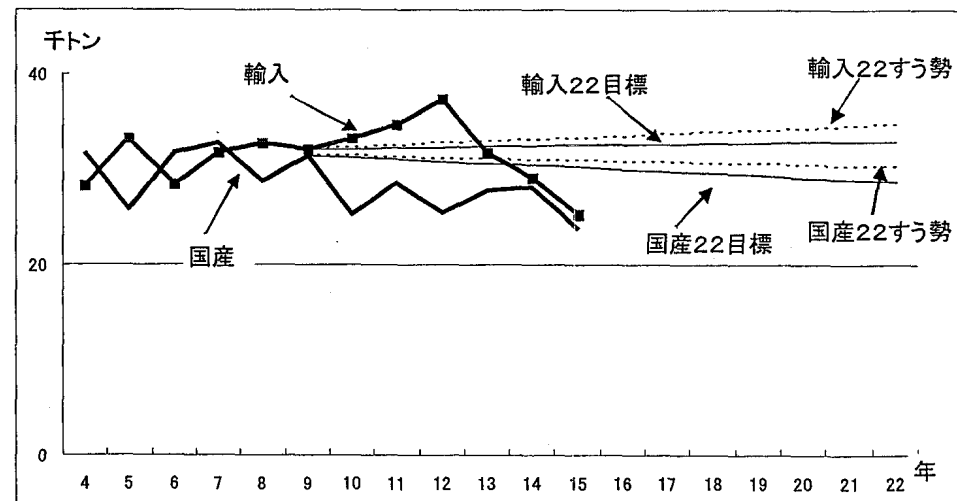


(11) くり（生鮮果実）

国産くり生鮮果実の国内消費仕向量は、25～29千トンで、平成22年度目標とほぼ同水準で推移しているが、近年減少傾向にある。

輸入くり生鮮果実の国内消費仕向量についても、30～35千トン前後で平成22年度目標とほぼ同水準で推移していたが、近年、皮を剥いた形態での輸入が増加したことにより、減少傾向にある。

○ くり生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

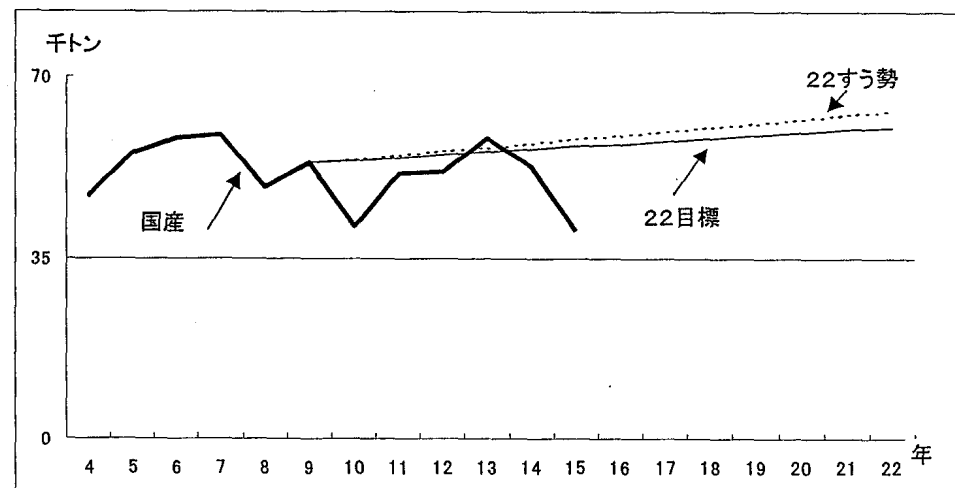


(12) うめ

① 生鮮果実

うめの生鮮果実の国内消費仕向量（全て国産）は、消費者の健康志向の高まり等から5万トンを上回り、平成22年度目標に沿って増加傾向で推移していたが、平成15年産が不作となったことから、国内消費仕向量が落ち込んでいる状況にある。

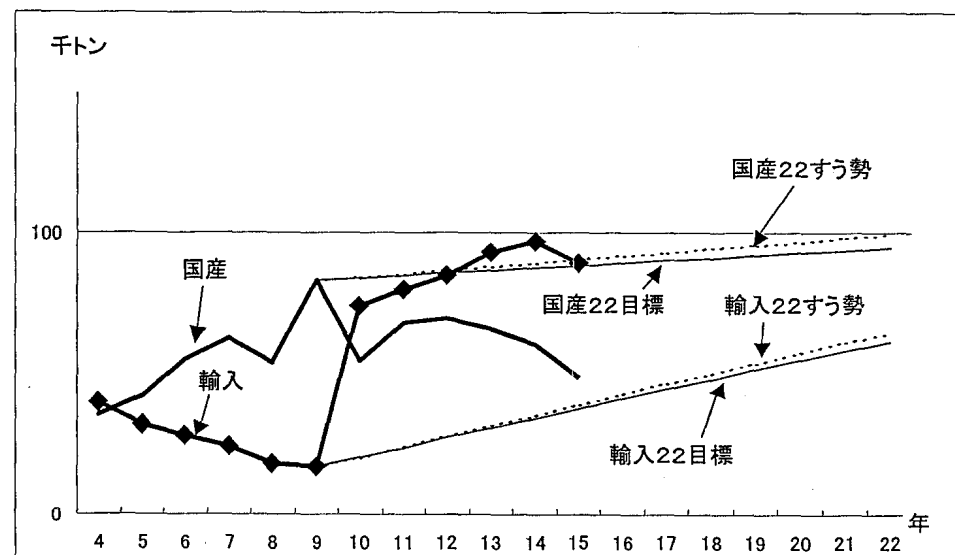
○ うめ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 果実加工品

うめの果実加工品の国内消費仕向量については、国産加工品は6万トン前後で減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移しているものの、輸入加工品は消費者の健康志向の高まりと価格が安価であることから、平成10年に急激に増加し、以降増加傾向で平成22年度目標を上回って推移している。

○ うめ果実加工品の国内消費仕向量の推移等

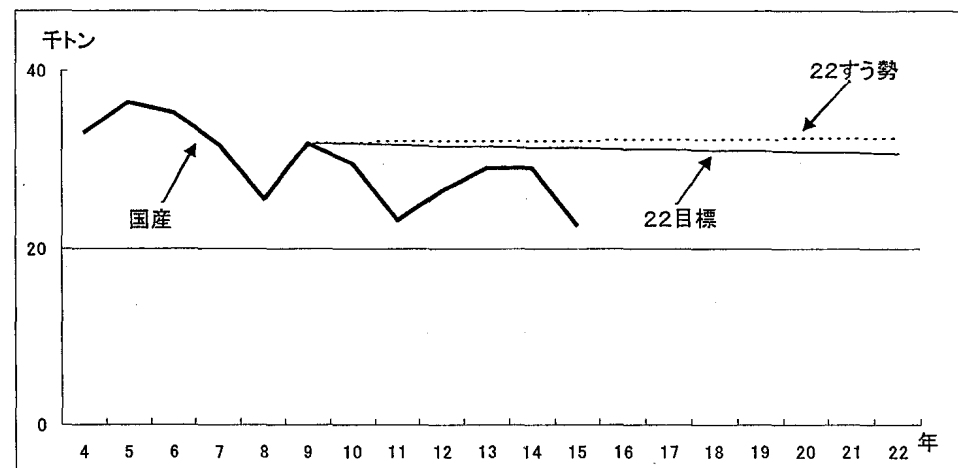


(13) すもも

① 生鮮果実

すももの生鮮果実の国内消費仕向量は、減少傾向にあるが、特に、平成15年産が冷夏による落果、品質低下等により出荷量が減少し、平成22年度目標を下回って推移しているものの、貴陽、太陽等の大粒系高品質の出荷が増加しているところである。

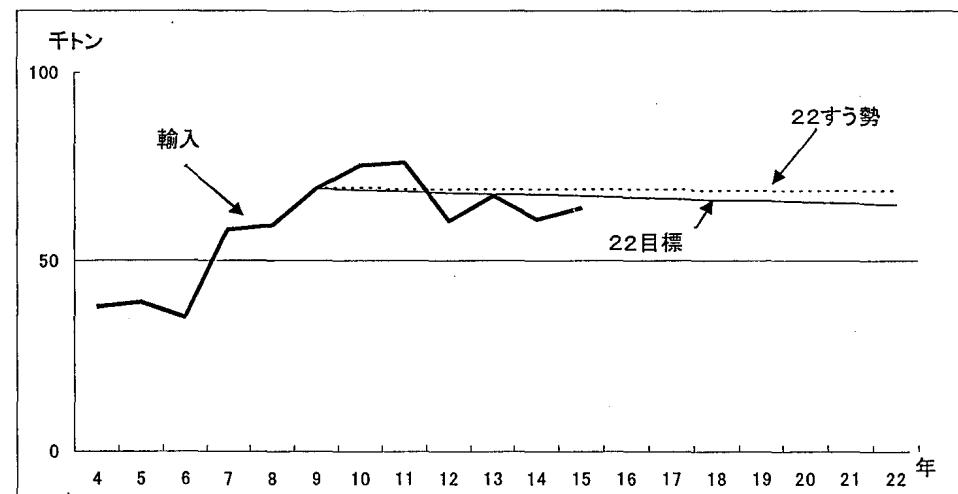
○ すもも生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 果実加工品

すももの輸入加工品の国内消費仕向量は、7万トン前後で平成22年度目標とほぼ同水準で推移している。

○ すもも果実加工品の国内消費仕向量の推移等

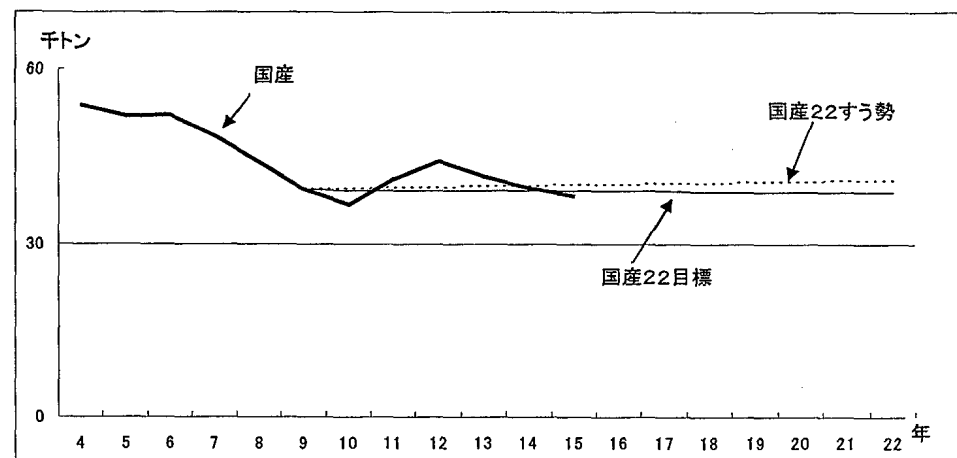


(14) キウイフルーツ

① 国産生鮮果実

キウイフルーツの国産生鮮果実の国内消費仕向量は、近年の消費者の健康志向の高まり等から平成22年度目標と同水準の4万トン前後で推移していることに加え、ブランド商品も近年出荷されており、需要は堅調に推移している。消費者アンケート調査においても、増やしたい品目の一つとなっている。

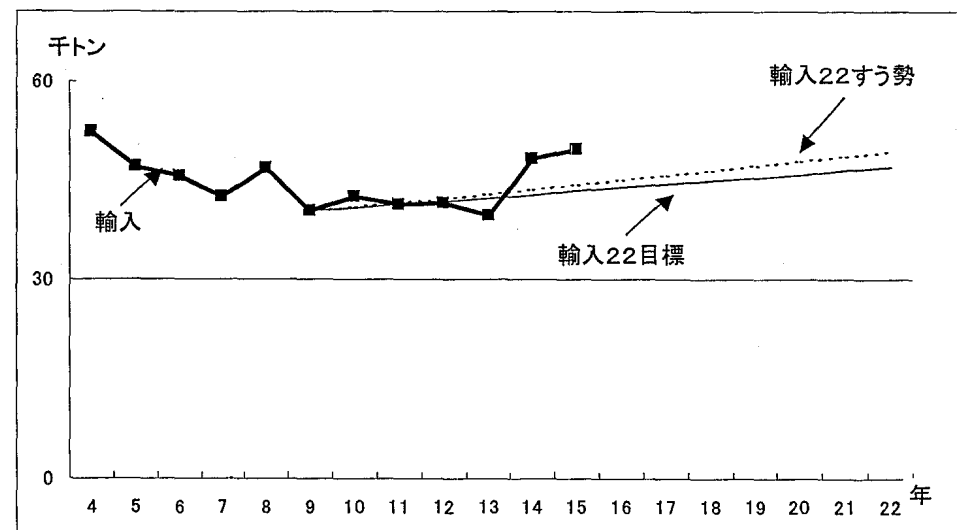
○ 国産キウイフルーツ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 輸入生鮮果実

キウイフルーツの輸入生鮮果実の国内消費仕向量は、国産と同様に4万トン程度で推移しているが、近年、ゼスプリ・ゴールド等高糖系品種の輸入量が増加したこともあり、平成22年度目標を上回り増加傾向で推移している。

○ 輸入キウイフルーツ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



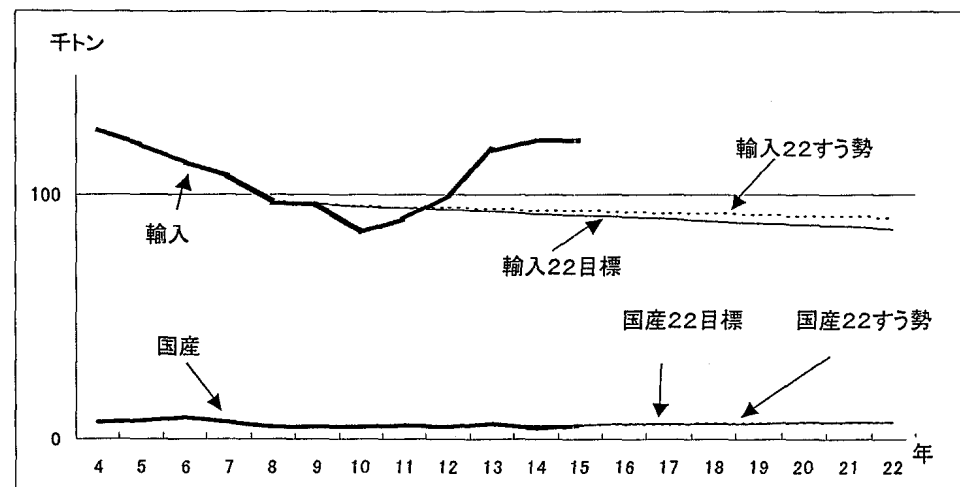
(15) パインアップル

① 生鮮果実

パインアップルの生鮮果実の国内消費仕向量は、平成22年度目標と同水準で推移しており、産地において高品質果実の出荷に取り組んでいるところである。

輸入果実は、平成10年度まで減少傾向で推移したが、近年、スイーティオ等に見られるような高糖系果実の供給やカットフルーツへの供給により増加傾向で推移している。

○ パインアップル生鮮果実の国内消費仕向量の推移等

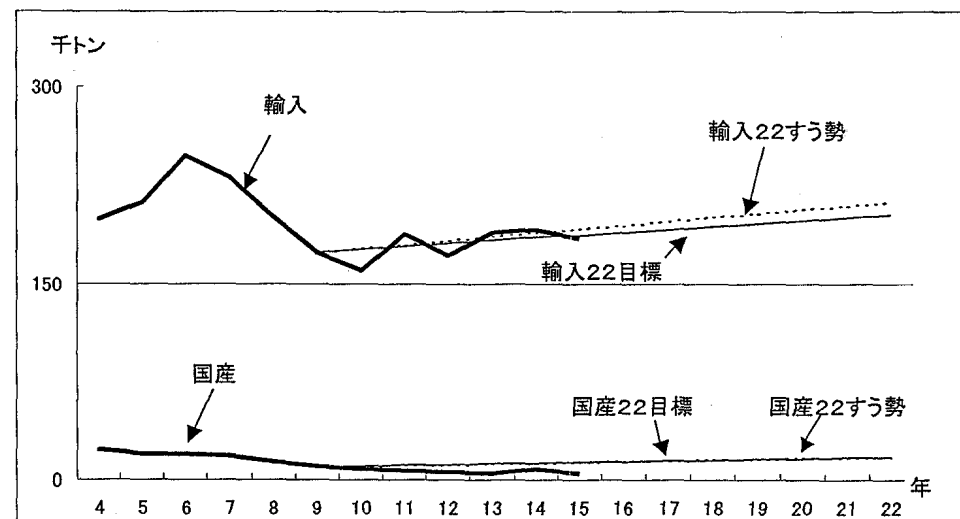


② 果実加工品

パインアップルの国産加工品の国内消費仕向量は、平成6年の2万トンを超えて、近年8～5千トンと平成22年度目標を下回って推移している。

一方、パインアップルの輸入加工品の国内消費仕向量は、平成6年の25万トンを超えて減少しているが、近年、平成22年度目標に沿って推移している。

○ パインアップル果実加工品の国内消費仕向量の推移等

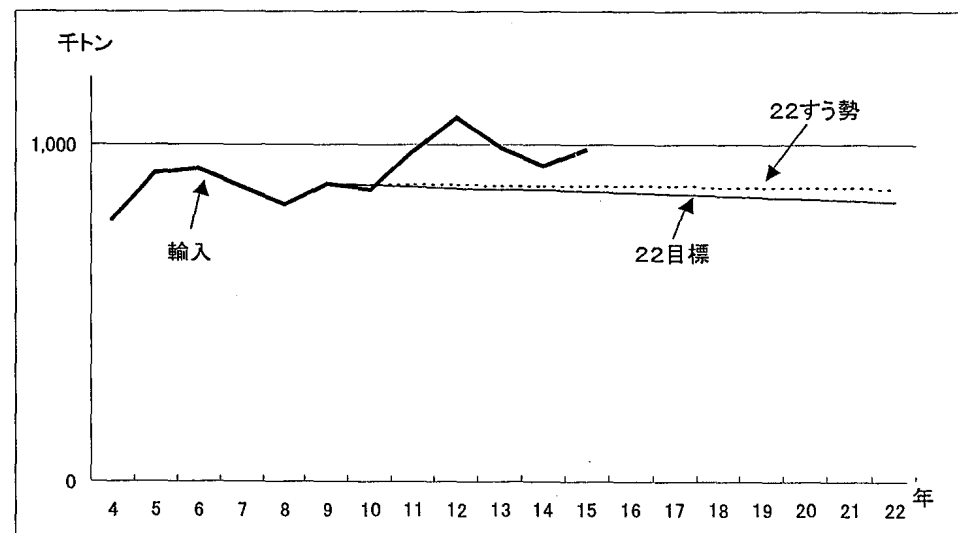


2 輸入果実の動向

(1) バナナ（生鮮果実）

バナナの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年の簡便化志向等にマッチしていることや健康機能性が注目されたこともあって増加傾向にあり、平成22年度目標を上回って推移している。

○ バナナ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



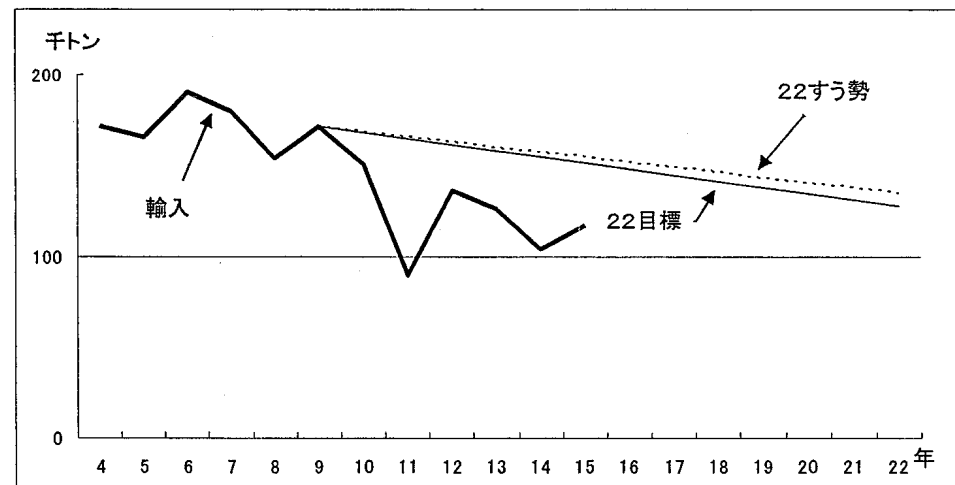
(2) オレンジ

① 生鮮果実

オレンジの生鮮果実の国内消費仕向量は、皮が剥きにくいこと等の理由により、近年減少傾向にあり、平成22年度目標を下回って推移している。

なお、平成11年の減少は輸出産地であるカルフォルニアの不作によるものである。

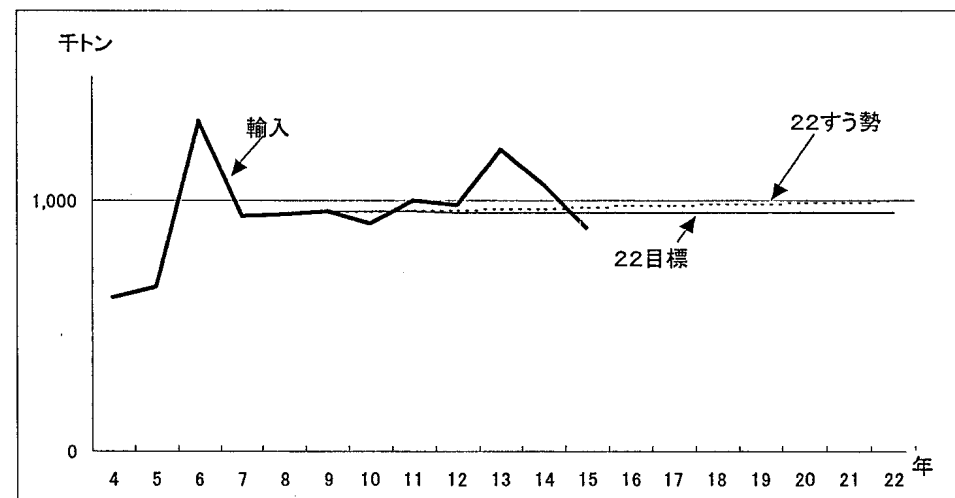
○ オレンジ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 果実加工品

輸入果実加工品のうち、最も輸入量の多いオレンジ果実加工品（果汁）の国内消費仕向量は、年により変動が大きいものの、ほぼ横ばいとなっており、平成22年度目標と同様の水準で推移している。

○ オレンジ果実加工品の国内消費仕向量の推移等



(3) グレープフルーツ

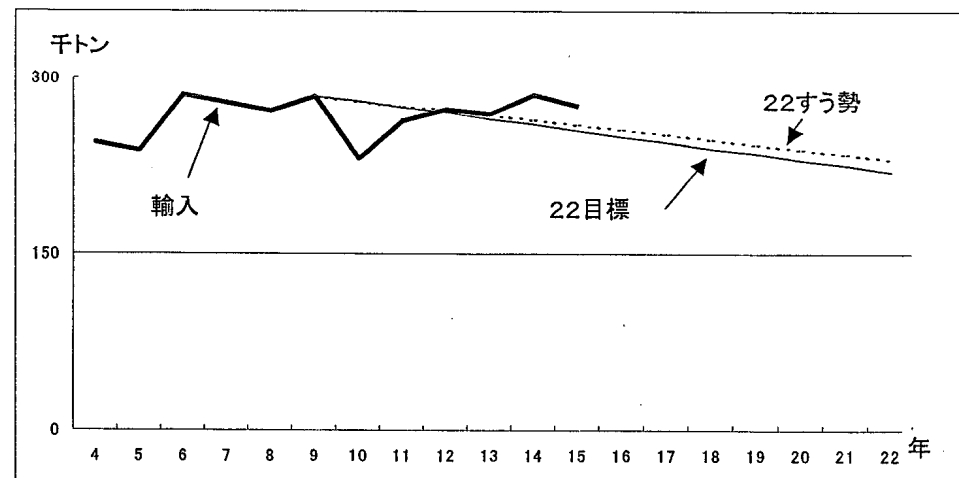
① 生鮮果実

グレープフルーツの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年、ルビィ種等の新品種の普及や生鮮果実を絞って飲料として摂取する方法が定着しつつあるとともに、近年、グレープフルーツの健康機能性が注目されたことから増加傾向にあり、平成14年以降、平成22年度目標を上回って推移している。

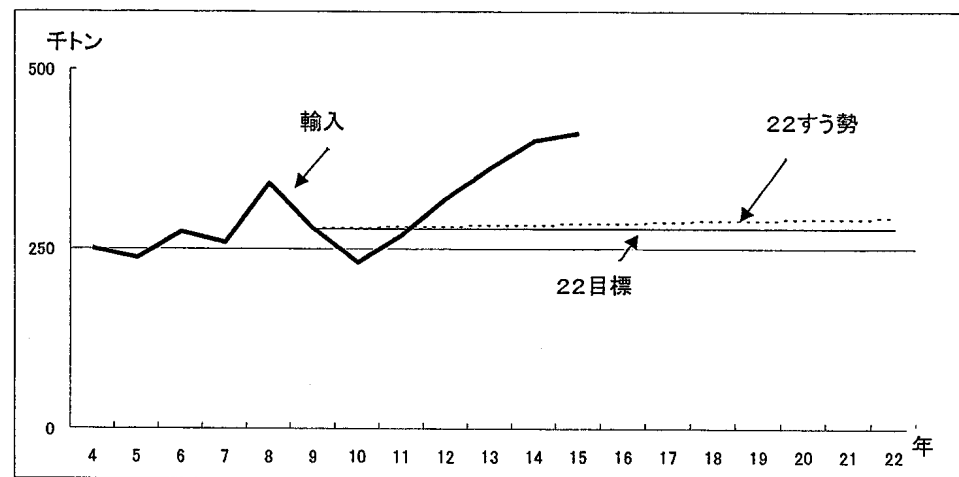
② 果実加工品

グレープフルーツの果実加工品の国内消費仕向量は、生鮮果実と同様に、グレープフルーツの健康機能性が注目されたことから増加傾向にあり、平成22年度目標を上回って推移している。

○ グレープフルーツ生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



○ グレープフルーツ果実加工品の国内消費仕向量の推移等



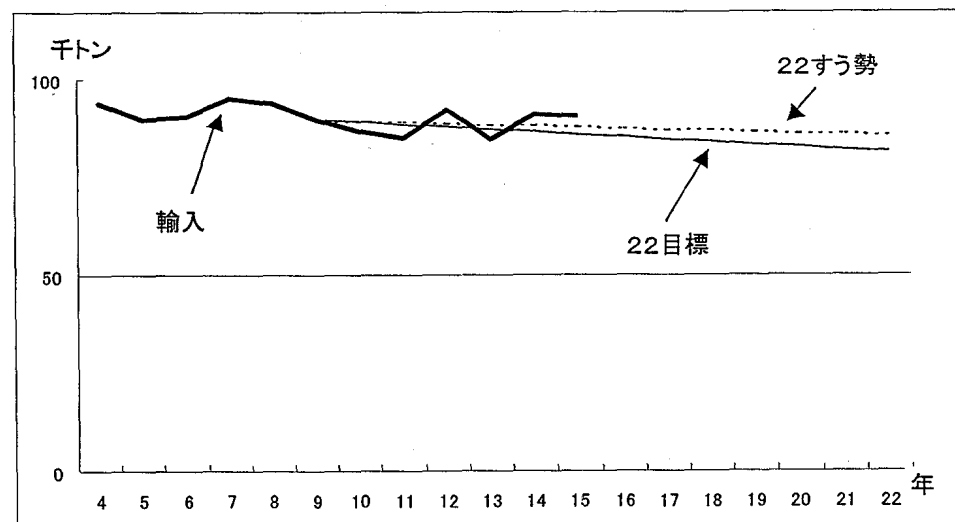
(4) レモン

① 生鮮果実

レモンの生鮮果実の国内消費仕向量は、近年、減少傾向にあり、ほぼ平成22年度目標に沿って推移している。

レモンの摂取方法は、国民の食生活に定着しているものの、カボス、スダチ等の雑かん類を始めとするレモンの代替品も食生活の多様化に応じて消費されている。

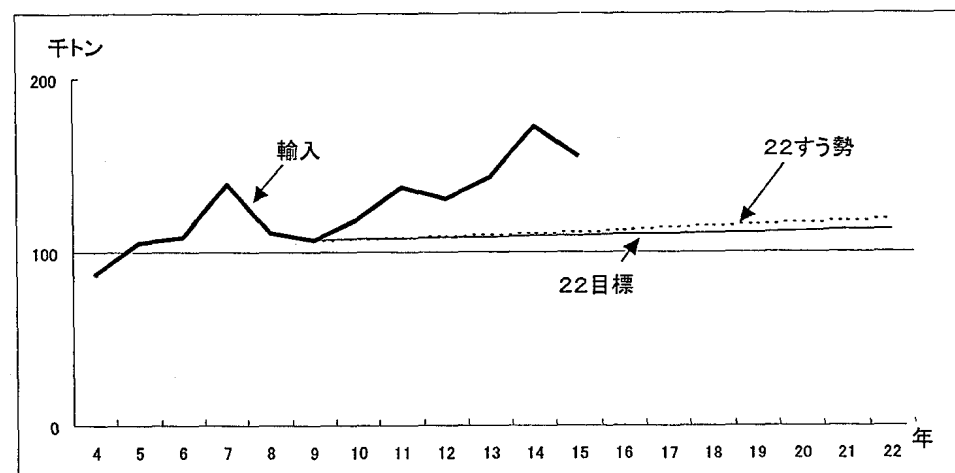
○ レモン生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



② 果実加工品

レモンの果実加工品の国内消費仕向量は、近年、レモン果汁の低アルコール飲料への仕向量が増加していることから、平成22年度目標を大きく上回って推移している。

○ レモン果実加工品の国内消費仕向量の推移等

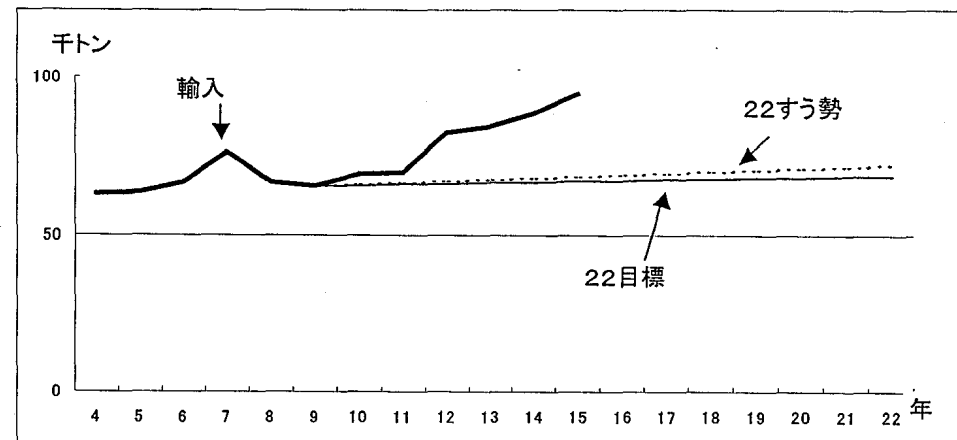


(5) その他の輸入果実（生鮮果実）

熱帯果実を中心とするその他の輸入生鮮果実は、近年、アボカド、マンゴー、ドリアン等、世界各地の多種多様な生鮮果実が輸入され、国内消費仕向量が急激に増加している。

この結果、その他の輸入果実については、平成22年度目標を大きく上回って推移している。

○ その他の輸入果実生鮮果実の国内消費仕向量の推移等



3 現行基本方針における22年度すう勢値の推計方法について

(1) 生鮮果実

推計方法	普通最小二乗法により需要関数を求め、重回帰分析により22年度における需要量を推計
需要関数の推計に用いるデータ	次のデータ（平成4年～9年）を用いて需要関数を推計 ①人口 ②1人当たり消費量（品目別） ③民間最終消費支出（4半期ごと） ④品目別価格 ⑤消費者物価指数
需要量算定式に代入するデータ	①品目別価格（P）（平成4年～9年の1・2類市場卸売価格の平均値を消費者物価指数で補正） ②民間最終消費支出（C）（平成4年～9年の平均値に所得上昇率（2%）を考慮）
留意事項	現在、検討が行われている食料・農業・農村基本計画における食料自給率目標の策定作業と整合性を図り、検討を進めていくことが必要
推計方法の特徴	①需要量を価格、民間最終消費支出等から算出できるため、数量の年次変動が大きい果実について推計するのに適している。 ②算定要素である目標年度の品目別価格や民間最終消費支出を適切に見込んで代入することが困難。 ③過去の数量と価格の関係が継続することを前提として推計することから、今後の経済動向の変化により、数量と価格の関係が変化した場合に推計値が実績値から乖離することが懸念。
他の品目の推計方法	米、麦、大豆、かんしょ、ばれいしょ、野菜、牛乳、乳製品、牛肉、豚肉、鶏肉、鶏卵、砂糖、茶等、ほとんどの品目が、 ・用途等別にトレンド（傾向）により直線回帰式、対数回帰式等を求め、1人当たりの純食料、純食料総計等を推計 ・用途等別に過去の平均値等に直近の動向を勘案して1人当たりの純食料、純食料総計等を推計

<参考> 【現行基本方針における生鮮果実の需要量算定式（基本形）】

$$\ln Q = a + b * \ln(P) + c * \ln(C) + d * \ln(P \text{ 競合品目}) + \text{月次ダミー}$$

Q：1人当たり消費量（品目別）

C：1人当たり実質民間最終消費支出

P：1・2類市場卸売価格（品目別）

a～d：普通最小二乗法により求めた需要関数

※ 上記の式に対象品目の計測月（一定量の出回数量がある月）ごとの実質民間最終消費支出、1・2類市場卸売価格を代入して、1人当たり月別消費量を推計した上で、22年の推計人口を乗じて算出。

(2) 果実加工品

22年度すう勢値については、果実加工品の輸入自由化が平成元年度以降逐次実施され、果実加工業を取り巻く状況が大きく変化しており、過去のトレンドによる推計が困難であったため、原則として過去6年の平均値を基準値として推計。

なお、現時点では自由化から10年以上経過しており、トレンドによる推計が可能。

(3) 輸出（生鮮果実）

過去における最大輸出量等を踏まえて算定。